

# ナマステ

特定非営利活動法人  
自然文化誌研究会 会報誌



## 124 号

2016 年 5 月 25 日発行号

### 夏～秋の企画が目白押しです！！

前号の表紙は、『零下 10℃の中、まふゆのキャンプを開催しました・・・』でしたが、今回はもう夏が迫っています。いやはや早いものです。

#### 活動報告

### その 1 冒険学校「むらまつりキャンプ」報告

### 5.3～5

小菅村の「第 29 回多摩源流まつり」に合わせて開催の本キャンプ。参加者は 17 名とにぎやかな GW となりました。



キャンプ場にてまったり



水温は 20℃には足りないぐらいですが、川遊びも。



小永田地区の神代神楽を見に浅間様へ。



最終日、小菅の湯も入ってさっぱりしました。



参加者の皆様には、写真の CD-R を同封しましたぞ！！



## **その2 のびと講座「野草の天ぷらとお茶つみの会」 報告 4.29**

毎年、東京学芸大学環境教育研究センター彩色園(旧農場)で開催しています。当日は強風でしたが、目的どおりに、お茶を摘んで製茶し飲むことができました。また、樹木医の岩谷美苗さんによる、野草講座では学内を散策し野草を収穫、野草の天ぷらにして美味しくいただきました。



お茶の収穫。手で摘んでいきます。製茶作業は蒸してからホイロで揉みます。講師は卒業生の宮本透さんです。



岩谷美苗さんによる野草講座、この後構内探索し、天ぷらにして食べました。

来年度も、4月29日の祝日に開催予定です。お楽しみに～！！

## **その3 のびと講座「小菅村での味噌づくり」 報告 3.12~13**



今年はひっそりと事務局の自宅にて仕込みました。当日は、道の駅こすげのイベントもあって見学者もいました。



# 「タイ環境学習キャンプ」特集～はじまってから20年③

今回は私たちの原点である、バードウォッチング（探鳥）について事の始まりを紹介する。私は、20代後半から野鳥に興味を持ち始め、出歩くときの道具に双眼鏡が新たに加わった。このころ「日本野鳥の会」や「鳥類保護連盟」に顔を出したり、五日市町（現 東京都あきるの市）に職場があったので、郷土館の仲間や野鳥に詳しい地域の方々からいろいろ教わった。20年前からタイに行き始めて、亜熱帯、熱帯の野鳥に出合った。ここでの師匠が、この連載の若林卓司さんなのである。

（かつてな編集人 中込 卓男）



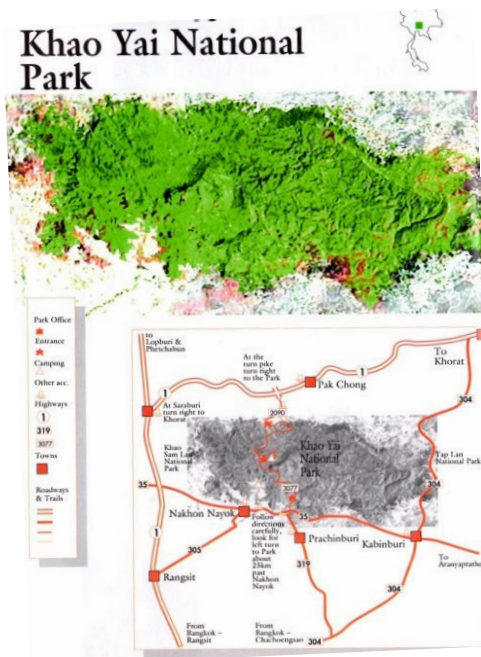
← 夜のパンダキャンプ（ウタイタニー・バンライ）シリポンさん（左）とギターを弾く若林さん（右）。二人は古くからの友人である。私たちの大切な友人であり、ともに環境学習を展開している。1年に一度だけだが、ワークショップをここパンダキャンプで一緒に実施する。ちょうどライブのセッションのように。

## タイの鳥 I カオヤイ国立公園で

若林 卓司

私は以前、プラナコーン教育大学で、日本語を教えていたことがあり、その時、環境教育の先生、学生と親しくなった。そして何度も教育キャンプに連れて行ってもらった。そんなわけで、東京学芸大学を中心とした環境教育のグループの人たちが、先生方と交流を深め、T・Jクラブを結成したとき、私にも声がかかってきた。

日本側はほぼ毎年三月の終わりがごろタイにやってきて、タイ側が用意したプログラムに沿ってタイの環境問題を直に見聞する機会を持ってきた。私の役目は通訳で、先生方の用意したプログラムはなかなかおもしろく、探鳥の時間もあるので渡りに船だった。また、久しぶりに日本人たちといろいろ話し合えるのも楽しかった。



※1

去年、1999年は北部、ドーイ・ステープ、ドーイ・インタノンへ行った。今年はサイチョウの生活環境を知るためにカオヤイ国立公園へ行った。とても幸運だったのは、サイチョウ研究の第一人

者ピライ先生の説明を受けたことだ。着いた日の夜、スライドによる説明があった。その100枚以上のスライドは見ごたえがあった。生活環境からサイチョウの生活とその保護、アフリカのサイチョウにまでわたっていた。ただ、先生の言葉を翻訳しなければならない私は、いつ終わるだろうかと、そんなことばかり考えていた。

次の日の朝はグループを三つに分けて、それぞれ子育て中のサイチョウを観察に行く。サイチョウはナイーブな鳥なので、巣の近くまで行ってブラインドで覗く二つのグループは人数制限。ピライ先生が引率するその他大勢のグループはハウスワット滝の方へ行く。道路から森の中へ少し入ったところが見晴台になっている。そこから谷を隔てた向こうの尾根に何本も大きなヤーンの木が立っていて、そのうちの一本に大サイチョウの巣があるという。二、三百メートルぐらい離れているので、肉眼でははっきり見えない。私たちは幸運だったのだろうか、午前中いっぱいかけて、オスが給餌に戻ってくるのを二回見る事ができた。望遠鏡の視野には細い隙間を残して閉じた洞の前にしかりと摑まって、吐き戻してフタバガキの実を入れている姿がはっきり見えた。また何羽かのオオサイチョウ、キタカササギサイチョウの飛翔も見ることができた。ピライ先生に尋ねてみると、繁殖に参加しない若い個体だそうだ。



▲オオサイチョウ

## ▼キタカササギサイチョウ



昼からは、サイチョウの生活環境としての森をピライ先生に案内してもらった。巣になる洞ができる木、餌になる果実のできる木、そういった木の生存のための戦略。クマやキツツキの役割。サイチョウを中心に据えると、今まで見えなかったものが見えてくる。この森のトレールではトラの足跡を見た。先生の片腕、ブンマーさんの話では昨夜の足跡だろうということだった。また、辺りでトラが縄張りのためになすりつけた強烈な尿の臭いもかいだ。このトレールではダニが多かったが、別のトレールを歩いた人は山ビルにやられたといっている人が多かった。

ピライ先生のサイチョウ研究はもう20年になるという。ないものだらけの出発だったそうだ。しかし、先生の努力によってもたらされたものは大きくて、貴重なものだと思う。



▲ブタオザル※2

三日目はバンコクに戻ることにしていた。でも、早朝、時間があったので、中込さん（なかごめ）、モンさん、それにタオと一緒にバンガローの周りを探鳥してみた。プタオザルが一匹木にいたが、ちょっと様子がおかしいので近づいてみると、ヘキサ（Green Magpie）がさかんにサルの回りを飛び回って攻撃している。

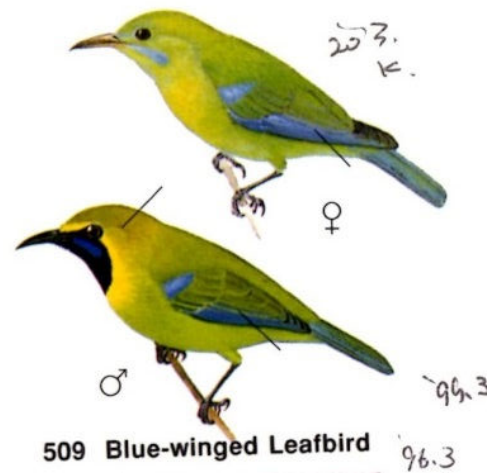


▲ヘキサ

この鳥はドバトより少し大きいぐらいの、くちばしは赤く、体は緑色のきれいな鳥だが、性格はなかなか荒っぽい。バンコクの北、バンサーイに鳥の大きいケージがあり、中に、いろいろな鳥が放し飼いにしている。なかなか見られない鳥が近くで見られるので、何回か行ったが、あるときこの鳥はケージの中で子育てをしていたらしく、知らずに近くを歩いて頭をしたたかつつかれたことがあった。けっこう痛かった記憶がある。サルは巣の中の卵かヒナを狙っているらしく、つつかれても、つつかれてもなかなか移動しない。しかし、その攻撃があまり執拗なのでサルもついに重い腰を上げたが、そのままでは収まらないようだった。近くにタイ人が「モット・デーン」と呼んでいる赤いアリの巣を見つけた。木の葉を楕円形に巻きつけて作った巣だが、サルはその巣を壊して卵を食べ始めた。イーサンでは中の卵は乙な食べ物になって

いる。しかし、このアリも荒っぽいことではヘキサに負けない。体についたアリの払い落とすのにたいへんそうだった。かなり手痛くかまれているのは明らかだった。双眼鏡で情けなそうなサルの顔を見ていると、こうはなりたくないと思った。

モンさんもタオも鳥を見つけるのがとてもはやい。そして、すぐに望遠鏡のピントを合わせてくれる。中込さんも私も後をついて行くだけだ。細い道を歩いて車道に出た。車道の片側の繁みにアオバネコノハドリのメスがいた。この鳥はオスよりもきれいだと思う。緑色の葉の中で、同じような色をしていながら、所々にある水色がなんともいえないような地味な鮮やかさを作り出している。



▲アオバネコノハドリ

タオが言う。「向こうのフタバガキの木にワシがいる。さかんに鳴いていた鳥が急に静かになったので見てみたらいた。」カンムリワシだった。



▲カンムリワシ

少ししてから、望遠鏡を覗きながら、今度はモンさんが言う。「あれは普通の犬じゃない。二匹今車道を横切った。」



結局、間をおいて、全部で六匹通過した。  
しかし、ずいぶん遠くを横切ったので、  
望遠鏡ではっきり姿を捉えても、どのく  
らいの大きさか実感するのが難しかった。  
尾は太めで黒っぽく、耳の内側の毛  
も黒っぽかった。野生のイヌで、タイ語  
では「マーナイ」という。鳥もたくさん  
いたし、この野生のイヌも気になったが、  
そろそろ戻らねばならない時間になっ  
た。帰りの道では二種のテナガザルがさ  
かんになき交わしをしていた。



▼シロテナガザル※2



▲野生のイヌ※2

出典

※1 Gray, Piprell & Graham (1994)

National Parks of Thailand

※2 John W.K. Parr (2003) A Guide to the  
LARGE MAMMALS OF THAILAND

※3 1, 2 以外のもの

Boonsong Lekagul, Philip D. Round (1991)

A guide to the Birds of Thailand

## 『植物と人々の博物館』 vol. 18

### 雑穀栽培講習会報告

5月14日(土)に、第19回雑穀栽培講習会を開催しました。今回は、東京学芸大学学生実習(自然文化調査法A & B)のフィールド実習としても開催しました。



講師は、畑と雑穀料理：丹波山村の岡部良雄さんご夫妻、上野原市西原地区の中川智さん。  
雑穀の専門のお話：木俣美樹男先生、小菅村のお話：守屋アキ子さん、青柳諭さんです。

雑穀料理では、ヒエ粥とモロコシ(甲州系=ムカシモロコシ)といんげんごはん、しゃくし菜の漬物をご指導いただきながら作り、食しました。雑穀の播種は、キビとアワでした。



雑穀料理



5月21日のちえのわ農学校は、田植えとドラム缶風呂もありました。

## 『山村の生物文化多様性と生活の豊かさ』

現在、人口 700 人余の小菅村では、源流の郷やエコミュージアム日本村など、村づくりの取組みが継続的になされてきました。これまでの経験の蓄積を学び直し、また、他地域の優れた経験をともに学ぶためのセミナーにしたいと思います。大きく変わろうとする世界のなかで、このくにをどのように再創造をするのか。まずは、地域社会学と日本史の視点からの話題提供をもとに、自然と向き合ってきた山村の豊かな暮らしを再認識し、深く考えるために、親密な話し合いの場を一緒にしましょう。

日時：2016 年 6 月 25 日（土）

場所：山梨県小菅村中央公民館

参加費：資料代など 1,000 円（小菅村民無料）、懇親会参加費 3,000 円 宿泊（1 泊朝食）6,500 円

※懇親会参加の方は、事前にお知らせください。

連絡問合先：NPO 法人自然文化誌研究会 事務局 黒澤友彦

e-メール [npo-inch@wine.plala.or.jp](mailto:npo-inch@wine.plala.or.jp) Tel: 0428-87-0165 携帯 090-3334-5328

主催：NPO 法人自然文化誌研究会、エコミュージアム日本村／ミューゼス研究会

共催：NPO 法人 ECOPLUS、協力：東京学芸大学環境教育研究センター

後援：小菅村、小菅村教育委員会、小菅村商工会、小菅村観光協会

※この事業は 公益財団法人 国土緑化推進機構 「緑と水の森林ファンド」の助成を受けて実施します。

### プログラム：

6 月 25 日（土）

昼の部～会場は 小菅村中央公民館

12:30～ 受け付け開始 小菅村中央公民館

13:00～13:20 趣旨案内と挨拶 青柳諭（ミューゼス研究会代表）

13:20～14:20 「地域を知る、生きる、形作る（仮題）」

山下祐介（首都大学東京・准教授、地域社会学・環境社会学）

地域を守る人とはだれなのか、誰がどういう形で、その土地の歴史や文化を継承していくのか、白神山地の山村からを考えましょう。

14:20～14:30 休憩

14:30～15:30 「山の恵みに彩られた山村の暮らし」

白水智（中央学院大学・教授、日本史・山村史）

山には多くの資源があり、住民はそれを活かす多様な知識や技術をもって、豊かな暮らしをしてきました。大震災に見舞われた長野県栄村（秋山郷）における文化財を活かした復興支援活動についても紹介します。

15:30～15:40 休憩

15:40～16:40 意見交換会など

16:40～17:00 まとめ 木俣美樹男（東京学芸大学名誉教授、民族植物学）

夜の部の会場は 広瀬屋旅館

18:00～20:00 座談会

※興味のある方は、事務局までご連絡を！！

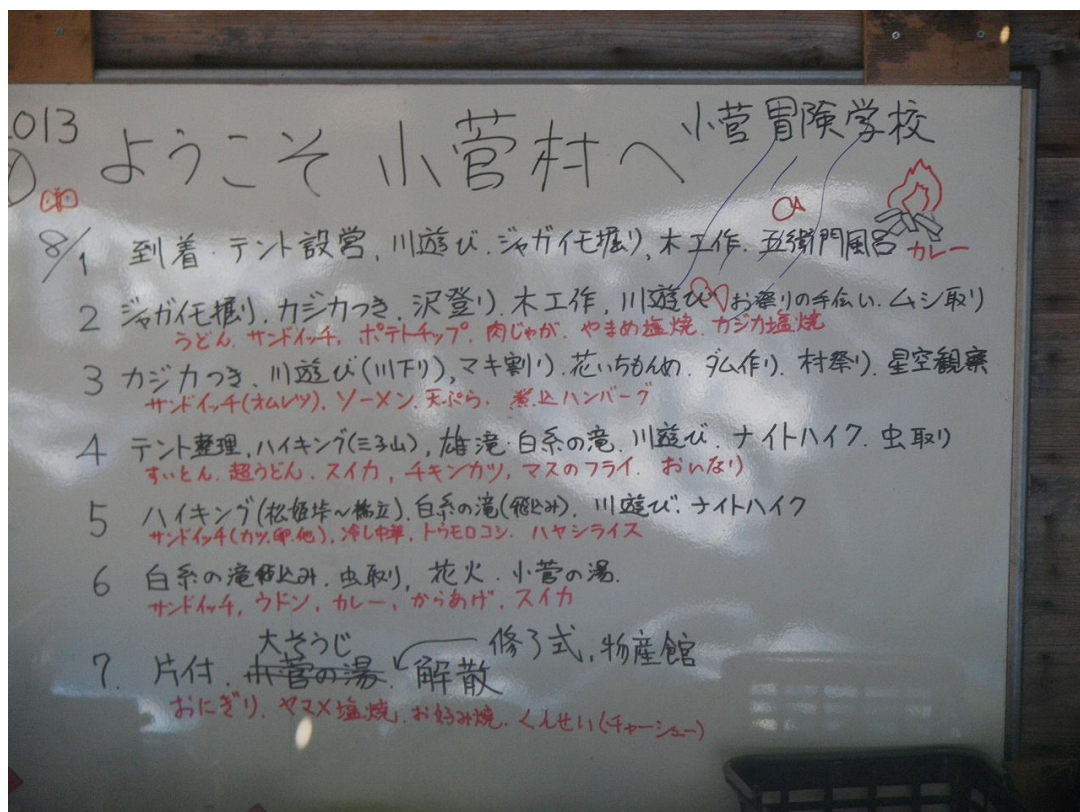


## その2 冒険学校「こすげ冒険学校」

8.4~8.10(6泊7日)

小菅村の自然と文化を満喫しながら過ごす6泊7日の長期キャンプです。川遊びでは飛び込んだり、魚がいっぱいいる淵で泳いだり、魚を捕ったり、思う存分に遊び続けよう！！寒くないように焚き火をしながら、お風呂も沸かしておこう。星を眺めながら眠ったら寝てしまおう！！一緒に山の中や村の暮らしを探検する7日間です！

日程：8月4日（木）～8月10日（水）6泊7日  
場所：小菅村のいつものキャンプ場  
宿泊：テント・ログハウス・野宿などで寝袋  
対象：小学校3年生～中学校3年生 20名  
参加費：会員：¥27,000 非会員：¥29,000  
申込み：7月9日（金）まで、先着順です。



今年はどんなプログラムになるか、楽しみですね！？

## その3 のびと講座「源流での登山道整備」7.29~31(2泊3日)

甲武信ヶ岳は、山梨県・埼玉県・長野県の分水嶺となっており、荒川・千曲川・笛吹川の3つの河川の水源です。ここから流れる水を飲み水、生活用水として利用しています。私たちの生活にかかわりの深い上流で、本当に美味しい源流の水を味わいながら、登山道での草刈り、整備を行い、一緒に汗をかきませんか？

甲武信小屋のご主人・山中徳治さんのお話を交えて、源流と流域のつながりを身をもって感じる講座です。

体力があまりないのでちょっと自信が・・・という方でも、自分のペースで活動できますよ。



やることはいっぱいあります。

日程：7月29日（金）～31（日）2泊3日 場所：甲武信ヶ岳と甲武信小屋の登山道  
宿泊：甲武信小屋（山小屋に泊まります！） 参加費：会員：¥15,000 程（宿泊費・交通費・保険代など）  
対象：高校生～一般15名（中学生以下は要相談） 申込み：7月9日（金）まで、先着順です。





## その5 冒険学校「やまめキャンプ」「いwanaキャンプ」 8.13~8.15

「小菅村をぜひ体験してみませんか？」1泊2日のキャンプをしながら、小菅村の自然と文化を感じるキャンプを行います。親子での参加が可能なキャンプです。大人の方もお子さまと一緒に、小菅村の自然や文化に触れてみませんか？一緒にキャンプをしながら、野外で食事をつくり、思いっきり遊びながらテントで休めます。「自然」という名の遊び場は最高ですよ。今年も「やまめキャンプ」「いwanaキャンプ」と連続して行います。連続で参加して2泊3日のキャンプにすることも可能ですよ～！！

「やまめキャンプ」：8/13~14 1泊2日 「いwanaキャンプ」：8/14~15 1泊2日

※連続での2泊3日OKでゆっくり過ごすこともできます！

場 所：小菅村のいつものキャンプ場

宿 泊：テント・ログハウス・野宿など

対 象：小学校3年生以上は子どものみの参加可能。20名

申込み：7月9日（金）まで、先着順です。

参加費：1泊2日親子での参加：20,000円（会員）

※ 連続参加、子どものみの参加は割引します。



お子さんと一緒に沢登り



白糸の滝ツボヘダイブ！！

参加の申込は事務局まで、E-mail かハガキで、氏名（ふりがな）、住所、電話番号、年齢（学年）をご記入の上、お気軽にお申しください。お待ちしております～♪

## その6 「INCH 祭り」～「INCH ライズ 2016」と「のびと講座きのこキャンプ」で楽しくやっちゃいましょう！！ 9.24~25（1泊か日帰り）

秋の一大イベント「INCH 祭り」を開催します！ログハウスのあるキャンプ場で、「INCH ライズ」と「のびと講座 きのこキャンプ」を開催し、秋の味覚を堪能しながら楽しい時を過ごしましょう！ライブをBGMに、のんびりとお酒、お茶でも飲みながら過ごしませんか！！音楽を愛する方は楽器持参で、腕に自信のある方もない方もぜひぜひお越しください♪きのこに興味のある方は、一緒に山に入ってきたのこを探りに行きましょう！！



←野外でバーも開催！

■日程 9月24日（土）～25日（日） 日帰りもOKです。

■会場：山梨県小菅村いつものキャンプ場

■参加費：日帰りの方 1,000円 宿泊の方 2,000円（ログハウスかテントで寝袋です）。バーのお酒はカンパ制です。

■交通機関 小菅村までの交通は自力でお願いします。

■お申し込み：ライブの当日参加はOKです。きのこ採りの方は保険に加入しませんのでケガのないように。



## その 1 「第 38 回環境学習セミナー」

9.3~4

### 『自然と暮らす知恵と技能を学ぶ。山村の生活技能・環境学習（冒険学校）』

自然文化誌研究会は、秩父多摩甲斐国立公園とこの周辺にある山村で環境学習活動／冒険学校や雑穀調査研究、これらの成果を応用して、エコミュージアム日本村／トランジション小菅など、山村維持の取り組みを 40 年あまり続けてきました。現在、精神性さえもがデジタル化されようと大きく変わりつつある世界のなかで、自然とつながるアナログ的な伝統的知識・技能が過疎高齢化によって決定的に失われようとする変曲点にあります。現実世界が仮想世界に蔽われようとするこの時代に、私たちアナログ自然・文化好きの冒険人たちはこの巨大な趨勢にどう抗うのか。

自然と直に向き合ってきた山村の豊かな暮らしを再認識しながら、私たちが生活する人生を深く考えるために、親密な話し合いの場をご一緒しましょう。自然学校・冒険学校などで培ってきた経験の蓄積を学び直し、私たち市民がこのくにをどのように再創造しながら、未来に向けて実体のある生活様式をどのように維持するのか、ともに学び、考えるためのセミナーにしたいと思います。

日時：2016 年 9 月 3 日（土）～4 日（日）

場所：山梨県小菅村役場および中央公民館、自然文化誌研究会拠点のキャンプ場（小菅村内）

参加費：資料代など 1,000 円（小菅村民無料）、懇親会参加費 2,000 円

宿泊費：キャンプ場：1 泊朝食（自炊）で 2,000 円 旅館：1 泊朝食で 6,500 円

連絡問合先：NPO 法人自然文化誌研究会 事務局 黒澤友彦

e-メール [npo-inch@wine.plala.or.jp](mailto:npo-inch@wine.plala.or.jp) Tel: 0428-87-0165 携帯 090-3334-5328

主催：NPO 法人自然文化誌研究会、エコミュージアム日本村／ミューゼス研究会

共催：NPO 法人 ECOPLUS、協力：東京学芸大学環境教育研究センター

後援：小菅村、小菅村教育委員会、小菅村商工会、小菅村観光協会

※この事業は 公益財団法人 国土緑化推進機構 「緑と水の森林ファンド」の助成を受けて実施します。

#### プログラム：

9 月 3 日（土） 昼の部～会場は 小菅村中央公民館

12:30～ 受け付け開始

13:00～13:20 趣旨案内と挨拶 中込卓男（自然文化誌研究会代表）

13:20～14:20 **「暮らしを創造する生きる力を生む冒険、自然体験」佐々木豊志（くりこま高原自然学校）**

山村で自然学校を経営ながら、2008 年「岩手宮城内陸地震」に遭遇して非常時の環境学習（サバイバル）の意味を、身をもって示した。さらに、この経験を活かして、東日本大震災が起こった時には、災害ボランティアセンターを立ち上げ緊急支援体制を構築した。最近、世界的にも、自然学校がいわゆる「Disney 化」しており、冒険心まで演出されることを危惧している。幼少期の自然体験の重要性から森のようちえん、さらに、自足可能な暮らしを想像するために森林資源利用から木質バイオマス、馬搬など復権と取り組んでいる。

14:30～15:30 「小菅村の自然、知恵と技能」 木下善晴（建設業・小菅村 80 代） 加藤源久（自然ガイド・小菅村 60 代）

15:40～16:40 意見交換会 テーマ：人生が冒険でなかったら、どこに生きる意味があるのか。困難に挑戦してこそ面白い人生だ。

16:40～17:00 まとめ 中込卓男（自然文化誌研究会代表）

夜の部の会場は 18:30～24:00 自然文化誌研究会拠点のキャンプ場（小菅村内）

※当日夜は、小菅村小永田地区の伝統芸能である「神代神楽」が奉納されます、希望者は見学ができます。

9 月 4 日（日） 8:30～11:30 伝統技能実技講習（内容は検討中） 講師：木下善晴、加藤源久

## 『藤農便り』 第 5 号

農業生産法人 藤野倶楽部

宮本 透（自然文化誌研究会）

春から夏へ季節が移り変わる時期、藤野の山には新緑の木々にからまった藤の花が咲き乱れていました。萌黄色に薄紫が入りまじった光景は、まさに藤野という地名の由来ではないかと思われるほどに印象的でした。日の出から日没までの時間が長くなってきましたが、畑の仕事は播種・育苗・植え付け・収穫・出荷・除草等々、次から次へと続きます。農民 2 年目、相も変らぬ土まみれの生活です。

### ・冬の反省

昨年夏に始まった野菜の出荷ですが、冬が近づくにつれ収穫できる品目が少なくなってきます。12 月になると畑の植え付け状況から、2 月には出荷できる野菜は尽きてしまうことが予想されました。社長に「まつばの百笑マルシェを休ませてほしい」と相談に行くと、「とんでもない！どのような思いでマルシェをつくってもらったのだ。何とかしろ！」としかられました。社長の言うことはもっともで、私もプロというものは契約したことは必ず履行するのが必要条件だと思います。厳冬期にわずか数㎡のマルシェコーナーに置く野菜も作れないのではプロ農民とは名乗れません。

1 月には大雪のためビニールハウスが倒壊、頼みの葉物野菜も無くなってしまいました。雪を掘って凍りついたキャベツやレタスを 1 つ 2 つ収穫し、サトイモや津久井在来大豆の袋と一緒にと並べましたがマルシェの棚はガラガラです。2 月から 4 月は屈辱の日々でした。ピオ市にくる津久井の若手農家はノラボウナ・ニンジン・カブ等新鮮な野菜を毎回販売しています。社長は激怒、「営農 40 年のプロ農家と元農業高校の先生がいて、何で藤野倶楽部は売る野菜が無いのだ！お前たち 2 人をクビにして若い者を雇ったほうがよっぽど会社のためになる」と怒鳴られました。

3 月に播種したコマツナやシュンギク、11 月に定植したキャベツが収穫できるようになり、久しぶりにマルシェの棚が安心農園の野菜でうまっ

たのは 5 月 1 日のことでした。この記念すべき 2016 年のメーデー、「この冬の屈辱を忘れず、津久井の若手農家のように野菜を年間通して生産・出荷できるようしっかり勉強しよう。2 度目のクビはコリゴリだ」と心に誓ったのでした。

### ・自給農耕ゼミ・藤野農学校準備

中央線藤野駅ホーム北側に日当たりのよい農地があります。昨年末、社長が「藤野駅近くの農地を買ったから、しっかり管理するように」というのです。ホームで電車を待つ人によく見える農地なので、特色ある作物を栽培すれば藤野倶楽部の PR になります。また駅から徒歩数分なので、誰でも気軽に訪れてもらえます。これから取り組む雑穀栽培や自給農耕ゼミの圃場等に活用したいと考え、木俣師に相談しました。

いろいろなアイデアを話していますが、その 1 つが藤野農学校です。街のサラリーマン家庭に育ち普通高校出身の私にとって、学大職業科で農業を学んだことは人生にとって大きな財産になっています。街に生活する農に関心のある人たちに実践の場を提供することは大切なことだと思います。ちえのわ農学校を卒業した子どもたちが藤野で引き続き農業を学ぶなんてことを考えると楽しくなります。

今は日々の仕事に追われ具体的な案は何もないのですが、6 月には雑穀栽培を始めます。中央線にお乗りになったら、車窓から藤野駅前の農地をご覧ください。

### ・藤野倶楽部牧野地区の農業

藤野倶楽部は名倉地区に安心農園と佐野川地区に茶畑がありますが、牧野地区には農地がありませんでした。昨年夏に小さなビニールハウスを建ててもらい秋植えの野菜苗を育てていましたが、このハウスも大雪でつぶれてしまいました。社長は「雪でも絶対つぶれない温室を建ててやる。そのかわり農園に植える苗は 1 本も買ってはいけな



い。すべて育てるように」というのです。そして完成したのがこの温室です。

養護学校に勤めているときから苗作りをしてきましたが、春植えの苗作りは温度管理が大変です。3 月末に放射冷却のあった日の最低気温は $-5^{\circ}\text{C}$ です。2 月に落ち葉を踏みしめて作った温床で発芽させた夏野菜の苗にビニールをかけ、さらに毛布で覆って寒さを防ぎました。反対に日中陽射しが強いと温室の中は  $30^{\circ}\text{C}$  を越えるので、遮光し扉や窓を開け室温を下げなければなりませんし、灌水にも気を使わないといけません。



完成した育苗用温室

ゆい農園・宮本農園・小島農園の皆さんには育苗についていろいろなアドバイスをいただき感謝しています。4 月のビオ市の後、つくいやさいのメンバーに育苗を見てもらいました。みんなからいわれたのは「こんなに土を使っているの！もったいない」でした。農業高校では「3.5 号ポリポットでたっぷり用土を入れ、根張りのよい丈夫な苗を育てましょう」と教えていたので目からウロコでした。この日から販売・会員用は 3.5 号、農園用は 3 号と用土の量を節約しています。毎日温室にいと、レストランにいらっしゃるお客様から「苗を売っているの？」と声をかけられます。今は F1 の種子をかなり使っていますが、固定種や自家採種の苗も徐々に増やしたいと思っています。

レストランのカウンター席は藤野の山や谷が見渡せる人気のスポットです。眼下にのんびりと山羊が草を食むススキ原が広がっています。この草原を開墾して農園にしようと社長がいいだしまし

た。社員総出で重機の掘り起こした木や草の根、大きな石などを取り除き肥料をまいて耕しました。猪よけのフェンスを張って約 1 反の農園が出来上がりました。これから土作りをして利用会員を募るのですが、畑仕事の後やまなみ温泉で汗を流し、自分たちで収穫した新鮮な野菜を味わってキャンピングカーやギャラリールームに泊まるという週末を楽しんでいただきたいと思います。



開墾した農園

この新しい農園の敷地は、リニア中央新幹線の工事残土捨て場に売らないかという話があったそうです。社長は「この土地は絶対売らない。残土捨て場なんかにはさせない」と話してくれましたが、私もこの農園を実り豊かな土地に育てたいと思います。リニア中央新幹線は、「命より金」の日本帝国主義がその生き残りをかけ原発・兵器とともに外国に売り込もうとしている最悪のものです。私の尊敬する三里塚芝山連合空港反対同盟の市東孝雄さんは空港敷地内の農地を守り空港建設を阻止し続けていますが、私もこの農園を耕すことでリニア中央新幹線工事にささやかに抵抗していきます。

#### <お知らせ>

藤野倶楽部は今年も INCH 賛助会員です。INCH 会員への特典として、ナマステ今号を持参された方には「百笑の台所」の食事料金を 10% 割引いたします。アクセスは藤野倶楽部の HP をご覧ください。

## 『INCH の楽しい仲間たち』 vol.7 その7

## 『冒険探検粉塵記 第7話 キビに魅かれて文明の十字路へ』 駄作者 文福洞先斗

キビの栽培化起源の地は中央アジアからインド亜大陸北西部であるとの仮説を、阪本老師が唱えたがために、ポンちゃんは中央アジア内奥に行くことを願望し始めた。いいよな～、莫高窟の敦煌や流砂に埋もれた楼蘭、ウルムチやトルファンのもっと更に先、ウイグルなど遊牧民族の草原と砂漠の世界、太陽の国ホラズム…。探検への憧れ、血が熱くなってくるよね。

今から 20 余年前（1993）、憧憬が現実となった最高の探検旅行の日々での、多くのシーンを鮮やかに思い起こすと、自賛で手放しについ顔がほころんでしまう。砂漠の熱さに生きる実感があつた。ガンガの蒸し暑さとは違う、むしろ心地よい、乾いた熱さだった。詳細な事実の旅行記は改めて書くことにし、ハイライトのみを脚色して、夢の日々の思い出を語りたい。

サマルカンドのバザールでは、シャシリクの焼ける匂い、ハミウリの甘ったるさ、ラグマンの油の味、プロブの丸ごとニンニク、ジャガイモとよく合うディルが好きになった。今ではキュー植物園で購入したディルを毎年育てている。

中央アジアハイウエーの路側、ポプラ並木の下で飲んだ温いピーバ。トレーラーがドラム缶を大きくしたようなピーバのタンクを運び、路側に置いていく。ジョッキはコンポートの大きな空瓶だ。熱い路上で温いピーバを飲んでもうまきはなかったが、ほろ酔い心地はとてもよい。反対に、歓迎会でのウオッカの一気飲みには耐えられなかった。調査旅行でありながら正体を失うほどに酔いつぶされ、トイレで寝る羽目になった。そこで飲酒は当番制にした。ソ連崩壊後で、配給票がなければ庶民はウオッカなど買えないので、日本から偉い植物学者が来たという名目で、現地ウズベクの隊員は市長からガソリンとウオッカの配給を受けた。一人一人が挨拶をしては一気飲み、10 人いれば、10 杯である。

キルギス大学の薬草園で野宿した時は、その香りで心身が洗われるようだった。しかし、空港免税店で買っておいたシーバスも一気飲みで 2 本がすぐになくなってしまった。ロシア語、ウズベク語、キルギス語、日本語で、インターナショナルを合唱した。ソ連は崩壊して、レーニン像も引き倒され、砂漠の民は коммуニストから イスラム教徒に戻ったのだが、これだけが皆の知っている世界共通の歌だった。

ウルゲンチに行き、ヒヴァ城に泊まった。この頃は、まだ自由旅行は一般に認められておらず、インツーストのホテル以外では宿泊できないはずだった。したがって、外国人が泊まるのは 75 年来無かったことで、朝帰りなど、ちょっと粋だったのかもしれない。ブハラのミナレット（尖塔）にも登った。きつく狭いらせん階段を大股で回転しながら登るので、本当に目が回った。

ビシケクの大らかな街並み、スズカケノキ並木、乾いた空気、中央アジアにきてうれしかった。各地のバザールで、地元の産物食べ物を見て歩くことは、とても楽しい調査の始まりだ。多様な民族の人々が店を出し、また買い物に来ている。バザールの匂い、色彩、雑踏の音、生き生きとした人々、…五感が目覚めて、輝くね。バザールでは、ノンを展ばすローリング・ピン、取り出しようの厚手の手袋、ナイフなどを民具として買った。コーカンドのバザールでは、ハッとするような美少女と目が合った。彼女は小柄で、金色の装飾を施した帽子を着けていた。左右の店を物色しながらぶらついていたら、仕立屋の店先から、かの美少女が手招きしている。男心を見透かされたのかと狼狽したが、招かれるままに店に入って、店員の女性たちと一緒に写真を撮った。写真を送る約束をして、住所・氏名を書いてもらったので、日本から送った。今となってはウズベク語かロシア語かの区別もできず、彼女の名前も解らない。ペルシャ系の織姫なのだろうか、彼女は美しかった。

たった 2 か月ほどの調査旅行であったが、お金にはほとんど苦労した。まず、成田空港でエクセスを支払うように言われた。ソ連崩壊後で、食糧難なので、配給票がなければ食糧は買えないので、日本から食糧を持参せよとのこと、荷物が多すぎたのである。宅配便で送り返すということで、分散して隊員の機内持ち込みにし、



難を逃れた。トラベラーズ・チェックで調査費をもっていったが、モスクワに着いたら TC は換金できないと言われ、それでは現金なしと同様だ。困り果てて、後続メンバーには現金を持参するように言った。しかし、北京ホテルだけはとても悪い率で換金できるとのことであった。タジキスタンに行くと、新しい貨幣ソグが発行され、ロシア・ルーブルは使えないという。また、納得できない率で換金しなければならなかった。後に聞いた話だが、某国大使はブラック市場で換金して利ザヤを稼いだという。酒を飲みながら、大使の元調理人が言っていた。このルーブルも、1990 年以前の札は使えないなどと突然決められ、持っていたいくらかの札は紙ごみになった。研究所の所長は種子の持ち出しに関して多大な支払いを要求した。彼のアメリカ旅行の資金が欲しかったからである。私は、そんなに支払ったら日本に帰れないと名演技で金額を値切ったので、親しくなった研究員から喝采された。些末だが、通行税だとかお土産の関税だとか、あちこちで、公務員らから明らかな袖の下を要求された。また、抗生物質など医薬品の持ち合わせを渡すようにも要求された。ソ連が崩壊して、中央アジア諸国が独立するこの時期は、思想的価値観が崩れ落ちて、大変な動乱期であったのだろう。あくまでコミュニストという人もいれば、イスラムに戻る人もいる。中央アジアの民族史は実にダイナミックだ。

私たちはロシアのビザしかなかったが、国の転換期の空白期間に自由旅行ができた。独立したてで、ビザすら発給する体制が出来ていなかったということだ。その後、1996 年に、再度、インド経由でウズベキスタンに行った。日本でビザを取っていなかったのも、ビザを得るのはとても大変であった。日本から出たころには東京にウズベク大使館はなかったので、ビザは当然取得できなかった。インドに 1 年ほどいるうちに、東京に大使館が出来たので、日本人は東京でビザを得るべきだという論であったようだ。ニューデリーのウズベク大使館に何度も通い、無為に大気汚染のひどいニューデリーに 1 週間余計に滞在した。本国に聞いているというだけで、窓口で門前払いであった。やむを得ず、日本大使館ルートで取り計らってもらい、タシケントでビザを取得した。

農民の皆様、バザールの人々、日本語学科の学生の皆さんはじめ、多くの人々に親切にさせていただいて、無事調査旅行をすることができた。天山山脈の周辺を巡った旅行は後の研究に有益であった。キビの起源地、祖先植物をおおよそ確定できたからである。ウズベキスタンには多くの民族を出自とする人々がいる。ドイツ、朝鮮、トルコ、イラン、…。民族文化の多様性はハミウリの生物多様性以上で、まさに文明の十字路である。ウオッカ、ウイスキー、クワス、ピーバなど、酒もいろいろ飲んだ。カザフの馬乳酒は満天の星の下で野宿して遊牧民と飲んだ。ポンちゃんの楽しい人生的一幕であった。



写真：タシケント東洋大学日本語学科生とチャイハナにて  
(左)、多様性に富むハミウリ(中)、ミナレット(右)、スタ  
イリストと調査隊員たち(下左)。

## ○ 今後の活動予定のお知らせ (2016 年夏～秋)

- 6/25 『第 37 回環境学習セミナー～山村の豊かさ、生物文化多様性を知り、学び、伝承する』 @小菅村  
 7/29-31 のびと講座『源流での登山道整備』 @甲武信ヶ岳・甲武信小屋 2泊3日  
 8/4-10 冒険学校『こすげ冒険学校』 @小菅村 6泊7日  
 8/13-15 冒険学校『やまめキャンプ』『いwanaキャンプ』 @小菅村 1泊2日 or 2泊3日  
 8/13-22 のびと講座『タイ環境学習キャンプ』 @タイ 9泊10日  
 9/3-4 『第 38 回環境学習セミナー～自然と暮らす知恵と技能を学ぶ。山村の生活技能・環境学習』 @小菅村  
 9/24-25 『INCH まつり』～INCH ライブときのご探り @小菅村 日帰りでも 1泊でも

## ○ 事務局より

●山菜の本場、新潟県南魚沼市へ行ってきました。NPO 法人エコプラスの山菜採りイベントに参加～まーしーの勤める八海山酒造の見学と、飲み続けた旅でした～。 クロ

●薪ストーブの季節が終わって、あっという間に暑くなりました。今年も細々と畑を耕してズッキーニを植えました。はるこ

## ○ 事務局の麗しき日々

- ・やぎちゃん結婚おめでとう！ございます！！
- ・にっしーがパパになったそうです。おめでとうございます！！
- ・和田ちゃんもママになったそうです。おめでとうございます！！
- ・一方、農場の大ちゃんは大それた 30 歳を迎えたもよう。
- ・翔くんの告白「僕は軽トラを売って、ハイエースが欲しいな。」(続)
- ・尚子は二児の母になり若干老けたもよう(今年で 37 歳ですな)。
- ・ごみさんはいつの間にか、教務主任になったもよう。
- ・病気系ごみ派、ケガ系ごめ派、あなたはどっち？
- ・禁酒の理由？酔って、妻の鞆の中にゲロを吐いたからですよ…。
- ・翔ちゃん、はるちゃん、黒は「山梨 海の会」を発足させました。

## ○ 自然文化誌研究会 一緒に活動しませんか？

略称 INCH(インチ)。冒険・伝承・創造をキーワードに『国際的な視野で人間をとりまく自然と文化を野外において探求する野外環境教育のパイオニア』として、30 年以上にわたって活動を続けています。2004 年から NPO として再出発し、活動の中心を山梨県小菅村に移し、子どもを対象とした『冒険学校』や市民を対象とした『のびと講座』『ELF 環境学習中堅指導者養成講座(のびと研修会)』などの山村の自然や文化を学ぶ活動を通じて、持続可能な社会を形成していく上で必須である環境学習の実践と農山村の振興を実現させるため、エコミュージアムづくりを行っています。

本会の運営は会員の皆様のご協力と、会費で成り立っています。ぜひとも会員の輪を広げていき、納入をお願い致します。本会の趣旨に賛同いただける方なら、どなたでも会員になれます。会員には以下 8 つの種類があります。なお、正会員のみが総会における議決権を持ちます。それ以外の会員は、総会にオブザーバー参加となります。会費は年額(1～12 月)です。また、皆様からのご寄付も募っております。

正会員:10,000 円 一般会員:5,000 円

学生会員:3,000 円 賛助会員(個人・団体):10,000 円

家族会員:6,000 円 特別維持会員:100,000 円

植物と人々の博物館友の会会員:3,000 円

小菅村特別会員:1 口 1,000 円から

成合基金(冒険探検基金):「成合基金」と記載してください。

郵便振替口座 : 00100-2-665768

口座名 : 特定非営利活動法人自然文化誌研究会



ナマステ 124 号

特定非営利活動法人 自然文化誌研究会 会報誌

<発行日>2016 年 5 月 25 日

<編集>自然文化誌研究会 事務局

<発行>特定非営利活動法人

**自然文化誌研究会**

The Institute of Natural and Cultural History

<事務局>〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村 3337-2

TEL : 0428-87-0165・090-3334-5328(事務局黒澤)

E-mail: npo-inch@wine.plala.or.jp

H P : <http://www2.plala.or.jp/npo-inch/>

事務局ブログ: <http://npoinch.naturum.ne.jp/>